

刈り払いと幻想の森散策を実施 ~ 『土湯の森』の自然再生に向けて~

厳しい暑さも一段落となった8月1日(金)、最上川スキー場跡地での刈り払いと幻想の森散策を行いました。この刈り払いは、スキー場跡地に生育しているカエデ類などの稚幼樹の保育や更新補助を目的として、昨年度から実施しているものです。

当日の作業は、アジアやアフリカの農村のリーダーとして活躍が期待されるアジア学院の留学生と地域住民の協働で行うこととなりました。



刈り払い中!



参加者の皆さん

留学生は、インドやフィリピンなど8カ国からきた男女14名で、有機農業や林業について研修するため、戸沢村に訪れていたものです。

刈り払いは、残す樹木の説明や作業方法を説明してから行いましたが、留学生にとって初めて見る木が多かったことや下刈鎌での慣れない作業に苦戦している姿が見られました。

カメルーン出身のサムソンさんは「日本は工業の進んだ国という印象を持っていたが、農業や森林の管理にもきちんと



天然スギの前で「セイ、チーズ」

携わっていて、とても感銘を受けた」と話していました。

作業終了後は、幻想の森を散策しな

がら日本特産の木でもあるスギや最上峡周辺に自生しているユキツバキなどの下層植生を観察しました。特に幻想の森に自生する天然スギは、幹が地上2m付近からタコの足のように分かれているものが多く、通常のスギと違った珍しい形状をしたものが多いことから、留学生の関心を集めていたようです。

フィリピンで森林管理の仕事に携わっているレネさんからは「日本でのスギ花粉症対策はどうしているのか」といった質問も受け、花粉の少ない品種の開発や樹種の転換など日本で進められている対策について意見交換をしました。

今回の「土湯の森」づくりは、初めて海外の留学生を交えた取組となりましたが、森林へと復旧していくため、引き続き地域住民の協力を得ながら実施していきたいと思います。

取組は「みどり環境税」の交付を受けて実施しています。

**留学生らが農林業体験**  
戸沢で森づくりに挑む

アジアやアフリカの農村のリーダーたちが研修するアジア学院(栃木県)の留学生らが一日までの二日間、戸沢村で農業や林業について研修し、知識を深めた。

インド東北出身のメノビノ・クロセさん(24)は「インドは焼き畑農業なので毎年、山を焼く。森林回復のプログラムは初めての体験で、面白い」と話した。

村国際交流協会(委員長が一九八六昭和六十二年から留学生

斜面に木が育つ様子を聞く留学生たち(戸沢村)

再生実施協議会の土湯の森づくりに挑戦し、刈り払いを体験した。このほか、ミニトマトの栽培施設や炭焼き小屋を見学した。

との交流を開始。一時中断したが、二〇〇五年から復活した。

平成20年8月3日(日) 山形新聞